

【漁況】 [マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、1965年の53万トン进行ピークに減少傾向となり、1980年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、1996年には33万トンに増加し、1998年までは30万トン台で推移しましたが、その後再び減少傾向に転じ、2022年は9.9万トンとなりました。

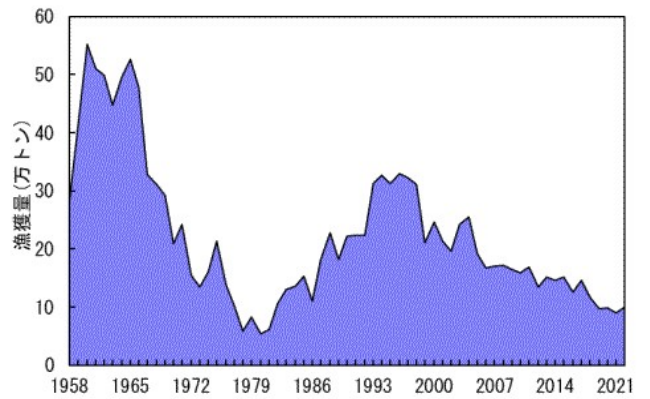


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の2024年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、1月に串木野沖で仔（1歳魚：2023年生まれ）主体の漁場が形成されました。2月には野瀬で豆、仔（1歳魚：2023年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、1月に野間池沖で豆（1歳魚：2023年生まれ）主体の漁場が形成されました。2月には串木野沖で豆（1歳魚：2023年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で1,994トンの水揚げで、前年の236％、平年の195％でした。

3. 県内の2024年4～6月期の見とおし

漁獲主体：豆銘柄（1歳魚：2023年生まれ）

来遊量：前年並みで、平年を上回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続き今期もマアジの2023年生まれ主体となることが予測され、直近の東シナ海での漁模様から、前年並みで、平年を上回ると考えられます。

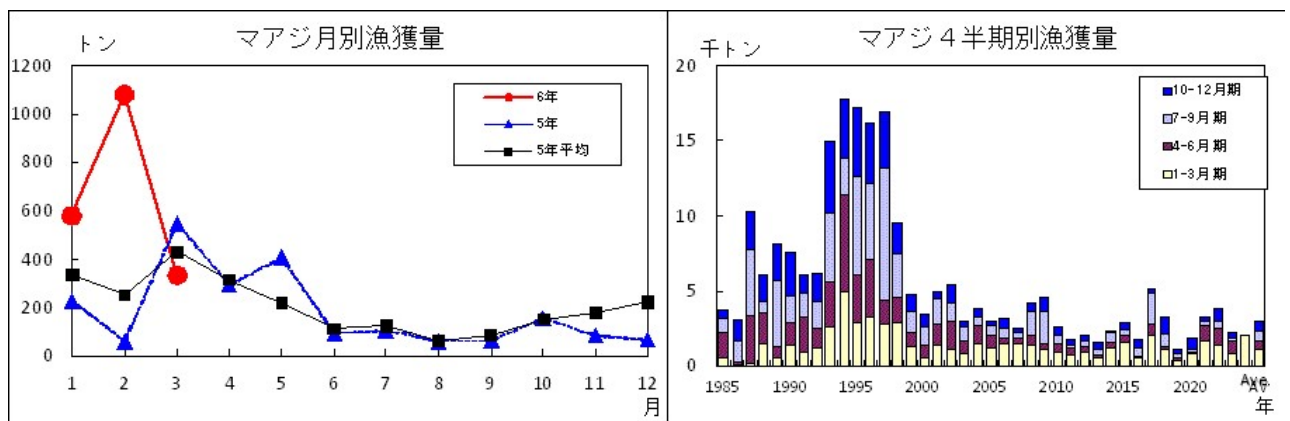


図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2024年3月19日までの水揚げ量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、1978年の160万トン进行ピークに年々減少し、1991年には26万トンとなりました。

1993年から増加に転じ1997年には85万トンとなりましたが、2002年には28万トンまで減少しました。

2006年に65万トンまで増加したあと減少傾向となり、2022年は32万トンとなりました。

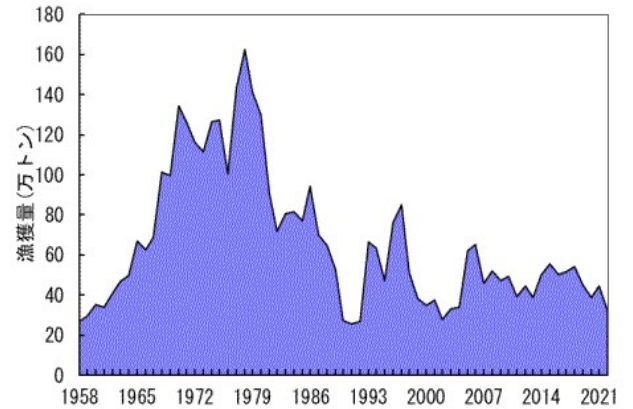


図 全国のサバ類漁獲量の推移

年

2. 県内の2024年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、1月に五島下、男女群島でサバ類大、中（3歳魚以上：2021年以前生まれ）主体の、串木野沖でサバ類小、豆（2歳魚未満：2022年以降生まれ）主体の漁場が形成されました。2月に五島下でサバ類中、小、豆（3歳魚以下）主体の、野瀬でサバ類小、豆（2歳魚未満：2022年以降生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、1月に甑東、ツクラ瀬でゴマサバ中、中小（1～4歳魚：2020～2023年生まれ）主体の漁場が形成されました。2月には串木野沖でゴマサバ大、中小、豆（1～4歳魚以上：2019年以前～2023年生まれ）、マサバ大（4歳魚以上：2019年以前生まれ）主体の漁場が形成されました。3月には内之浦、馬毛でゴマサバ大、中、中小主体（2歳魚以上：2021年以前生まれ）の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で2,900トンの水揚げで、前年の146%、平年の46%でした。

3. 県内の2024年4～6月期の見とおし

漁獲主体：ゴマサバ豆～大銘柄（1～5歳魚：2019～2023年生まれ）

来遊量：前年を上回り、平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期の漁獲の状況をふまえるとゴマサバ豆～大が漁獲の主体となることが予測されます。

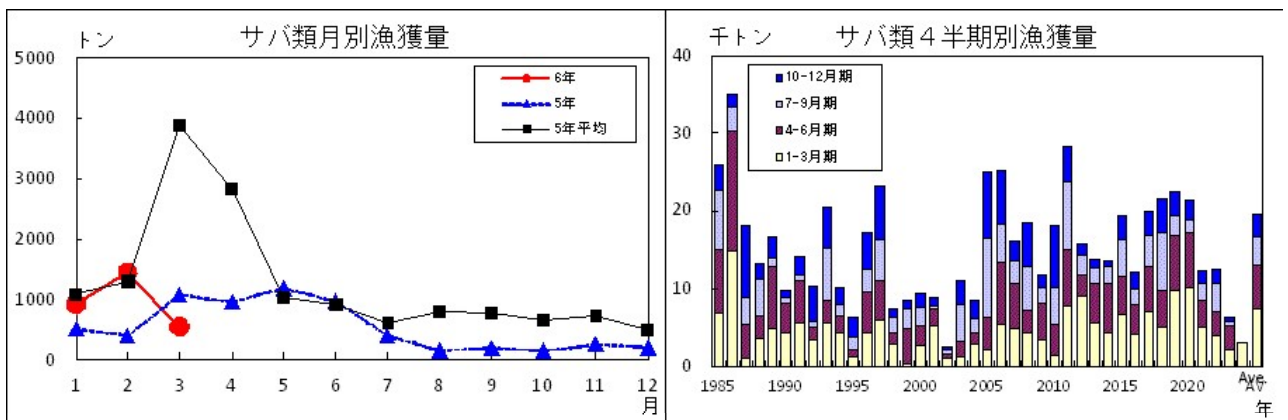


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2024年3月19日までの水揚げ量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、1950年代から1960年代にかけての不漁期の後、1973年頃から増加の傾向が見られ、1988年には449万トンまで増加しました。

1989年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、2002～10年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、2011年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、2013年以降は20万トンを超える漁獲が続き、2022年は64万2千トンとなりました。

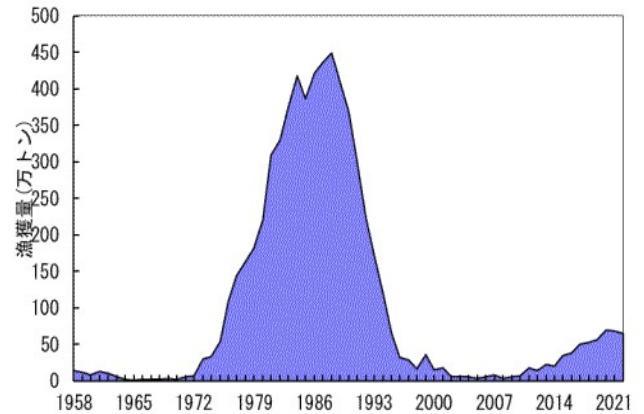


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

年

2. 県内の2024年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、3月に甑東、縄瀬、天草沖、阿久根沖で大規模な漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、中～大羽（2～4歳魚：2020～2022年生まれ）主体に3,564トンの水揚げで前年の174％、平年の853％でした。

北薩海域の棒受網では、50トンの水揚げで前年の29399％、平年の3535％でした。

3. 県内の2024年4～6月期の見とおし

漁獲主体：4～5月は中～大羽（2～4歳魚：2020～2022年生まれ）主体で、5月以降は小羽（0歳魚：2024年生まれ）主体

来遊量：前年・平年を上回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過から予測しました。

今期前半の漁獲主体となり産卵親魚である中～大羽（2～4歳魚：2020～2022年生まれ）は前年を上回る好調な漁が続いており、期後半の漁獲主体となる小羽（0歳魚：2024年生まれ）の加入も期待されます。以上から来遊量は前年・平年を上回ると考えられます。

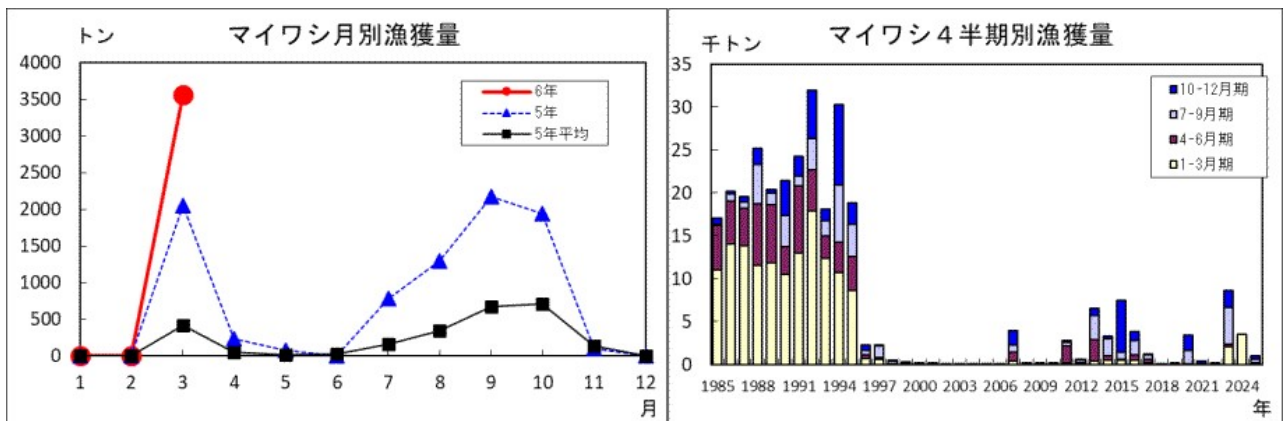


図 マイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値（AV）、2024年3月19日までの水揚げ量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、1950年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、1994年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ2000年には2万4千トンまで減少しました。

2003年以降は再度増加傾向に転じ、2016年は9万8千トンで1958年以降では最高の漁獲量となりました。

2022年の漁獲量は6万4千トンとなりました。

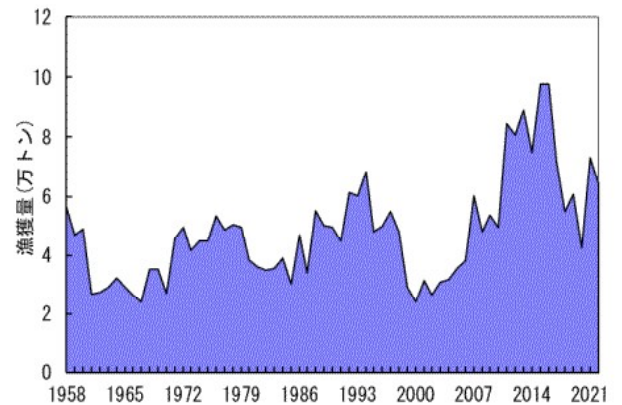


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

年

2. 県内の2024年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、期を通じて串木野沖、1～2月に縄瀬で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、1～2月に野間池沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中～大羽（1歳魚：2023年生まれ）主体に885トンの水揚げで、前年の251％、平年の209％でした。

北薩海域の棒受網では、25トンの水揚げで、前年の476％、平年の1,428％でした。

3. 県内の2024年4～6月期の見とおし

漁獲主体：4月は中～大羽（1歳魚：2023年生まれ）で、5月以降は小羽（0歳魚：2024年生まれ）

来遊量：前年・平年を上回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期の漁況を基に予測すると今期の来遊量は、前年・平年を上回ると考えられます。

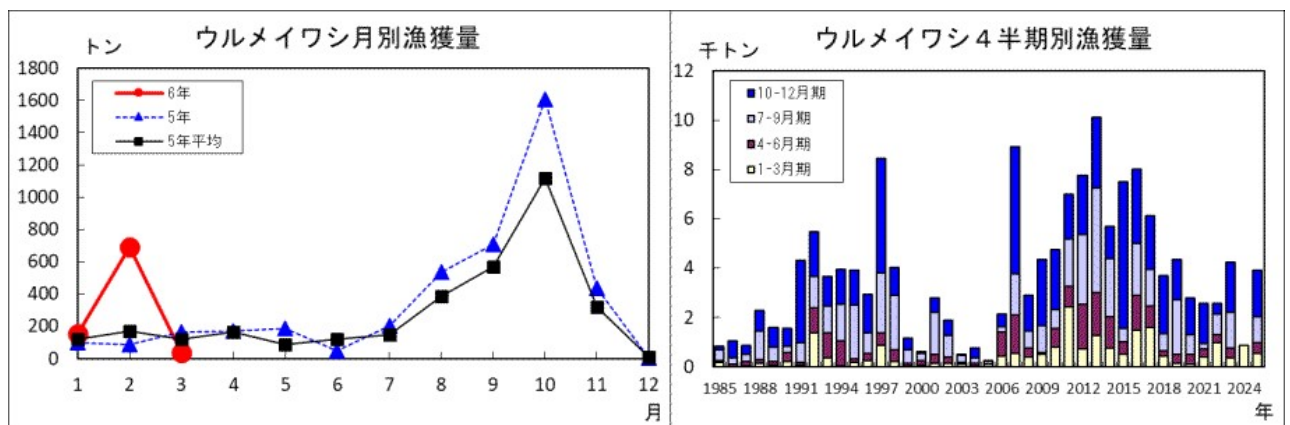


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2024年3月19日までの水揚げ量を使用

[カタクチワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチワシの漁獲量は、1973年まで30万トン台で変動していましたが、1974年以降減少傾向となり1979年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、2003年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、2022年は12万3千トンとなりました。

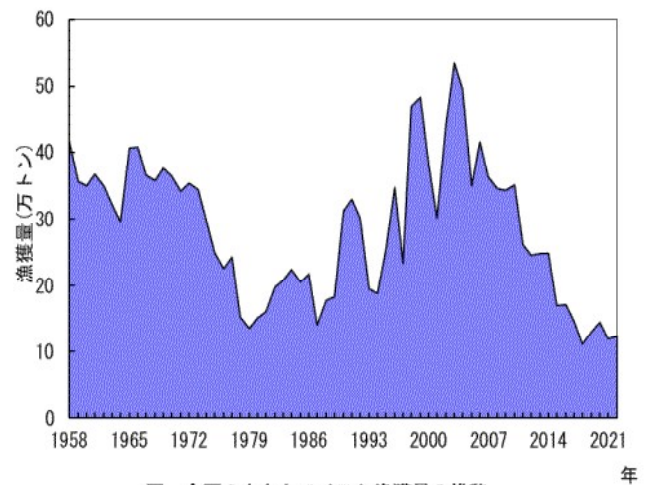


図 全国のカタクチワシ漁獲量の推移

2. 県内の2024年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、期を通じて八代海で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、期間中漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、中羽（1歳魚：2023年生まれ）主体に8トンの水揚げで、平年の24%でした（前年同期は水揚げなし）。

北薩海域の棒受網では、中羽（1歳魚：2023年生まれ）主体に85トンの水揚げで、前年の545%及び平年の115%でした。

3. 県内の2024年4～6月期の見とおし

漁獲主体：小～中羽（0～1歳魚：2023～2024年生まれ）

来遊量：前年・平年を上回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期前半に漁獲の主体となる中羽（1歳魚：2023年生まれ）は、年明けより棒受網で漁獲が続いており、0歳魚の加入も期待されることから、今期の来遊量は前年を上回り、平年並みと考えられます。

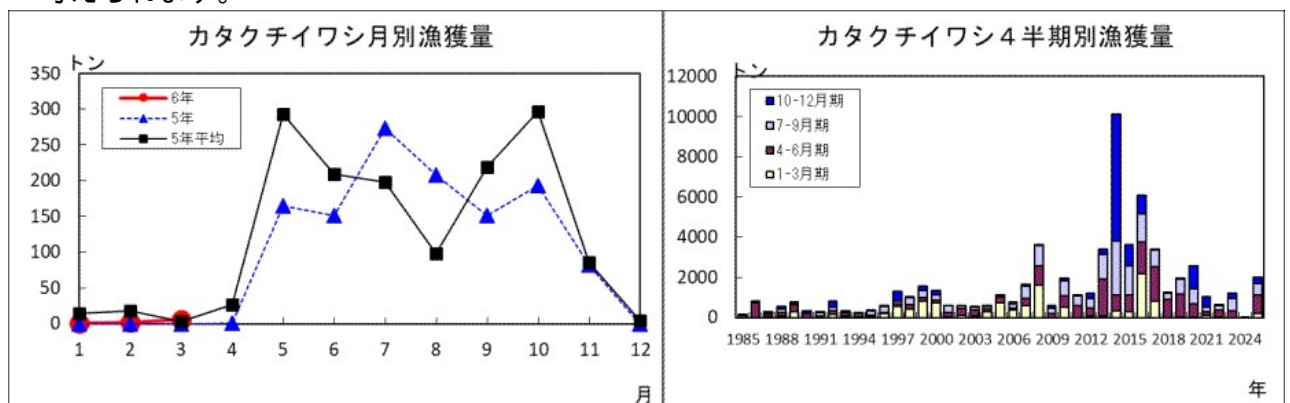


図 カタクチワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値（AV）、2024年3月19日までの水揚量を使用

[イワシ類参考資料]

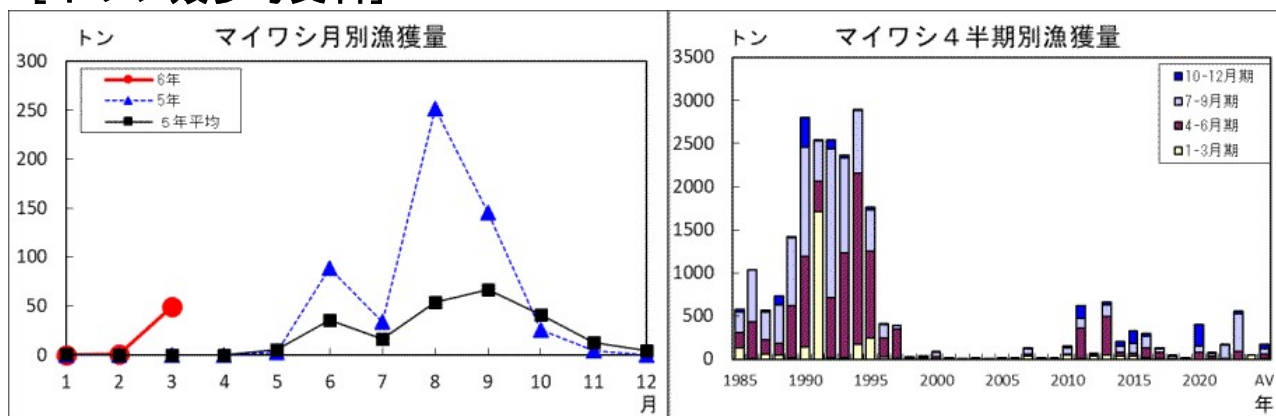


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

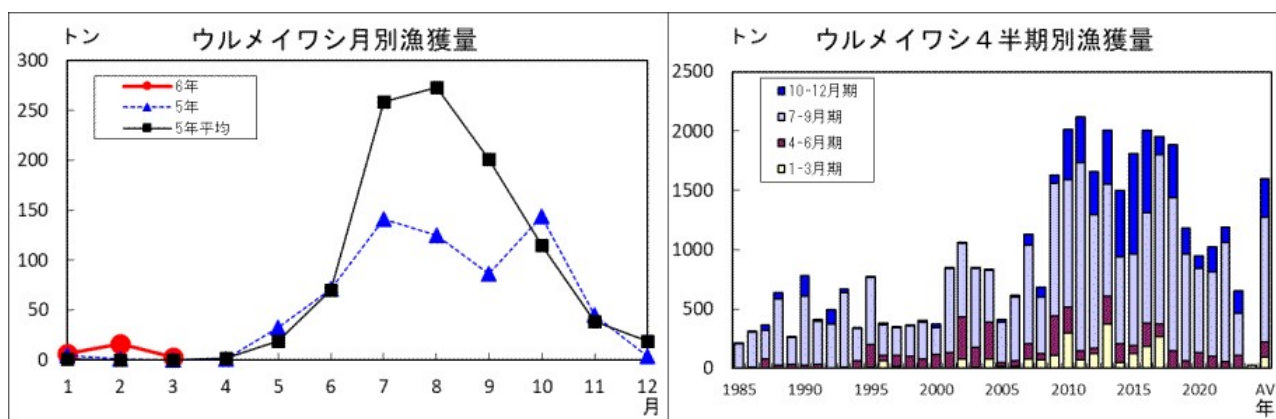


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

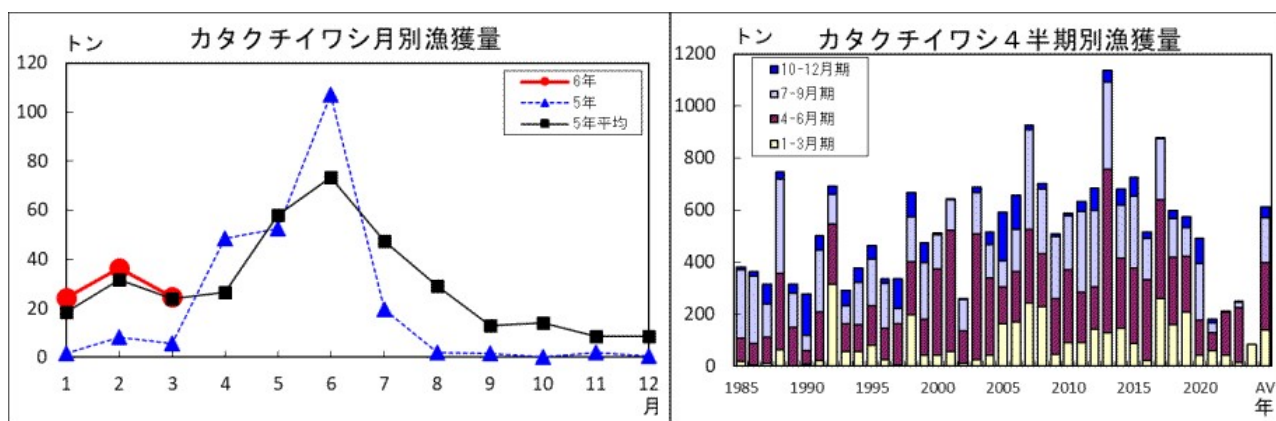


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 2024年3月19日までの水揚量を使用

[ムロアジ類（参考：漁況経過のみ記載）]

〈クサヤモロ、ムロアジ、モロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 経年経過

ムロアジ類の漁獲量は、1990年の21,700トン进行ピークに急減し、1994年以降は1,500トンから5,000トンの間での推移しており、2023年は1,964トンとなりました。

2. 2024年1～3月の漁況の経過

4港計のまき網では、種子島南、竹崎でクサヤモロ中、中小主体の漁場が形成されました。期全体で335トンの水揚げで、前年の54%、平年の56%でした。

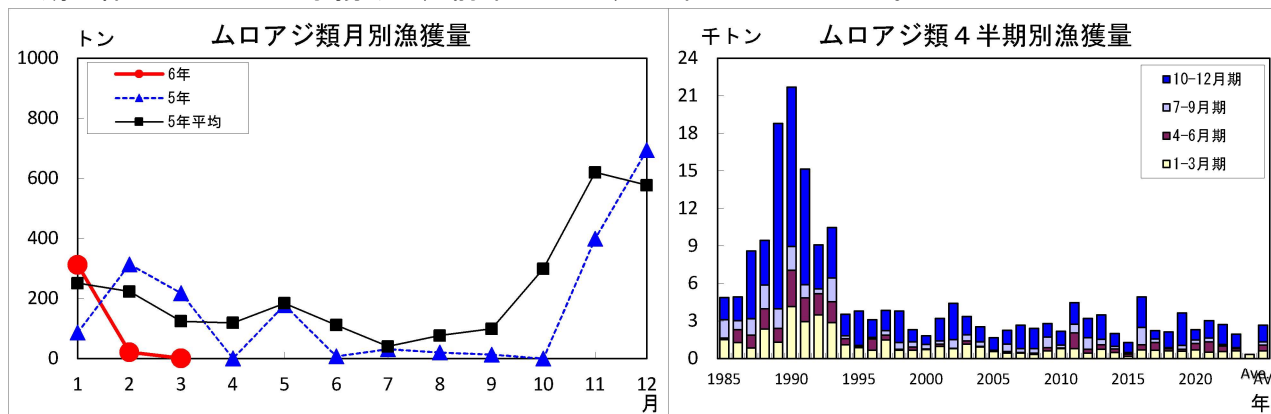


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2024年3月19日までの水揚量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 経年経過

オアカムロの漁獲量は、1989年の5,300トン进行ピークに一旦減少し、1995年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となり、2007年には700トンとなりました。2008年に2,300トンまで増加した後は700～2,400トンの間で推移し、2023年は353トンでした。

2. 2024年1～3月の漁況の経過

漁場は形成されませんでした。

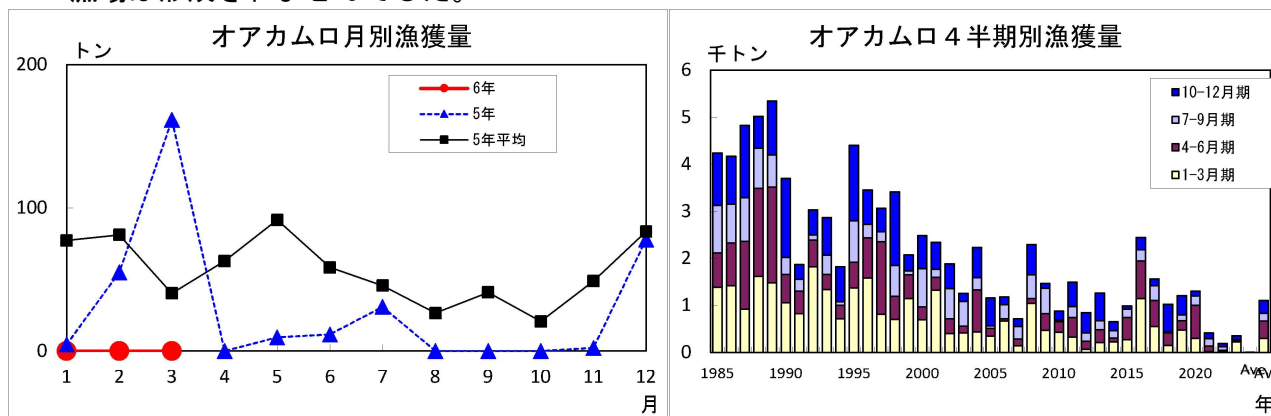


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2024年3月19日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4 港計）〉

1. 経年経過

マルアジの漁獲量は、1987 年から 1989 年に 1,500 トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、2000 年から 2003 年に再度ピークを迎え 2003 年には 3,150 トンと最高を記録しましたが、2004 年以降は低調に推移し、2022 年は 115 トンとなりました。

2. 2024 年 1 ～ 3 月の漁況の経過

4 港計のまき網では、内之浦沖で豆主体に漁場が形成されました。期全体で 212 トンの水揚げで、前年の 349 %，平年の 174 %でした。

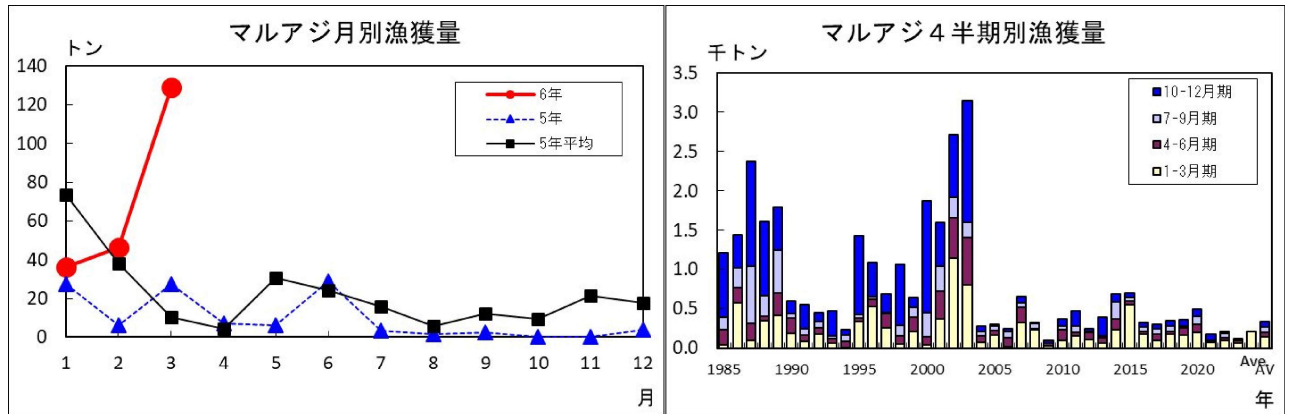


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値 (AV)，2024 年 3 月 19 日までの水揚げ量を使用